山口県史編纂所・山口県編

# 防長史料文献解題

マツノ書店

# 目次


一　皇室關係……一
二　書目及叢書……二
三　雜誌……四
四　社寺及宗教……八
五　教育……一四
六　語學・文學……二三
七　歴史……三六
　通史・時代史……三六
　地方史・特別史・年表・系譜……六八
　文書・記錄・金石文……七九
　傳記及傳記資料……一一五

防長人著書……一四一
八　考古・民俗・方言……一四三
九　地理・地誌……一五三
一〇　法制・經濟・社會……一七四
一一　理學……二〇九
一二　工學……二一一
一三　美術・工藝……二一二
一四　產業……二二三

體に編纂したもので五卷より成り、第一卷雲上・柳營・公統・諸省・社寺・祭祀類、第二卷には叢書・軍記・文武・目次・忠正公一件・忠愛公・兩川・官位祿・政理・館邸類、第三卷に諸家・故實・格式・地誌・万國・部寄・日記・部屋事・諸伺・防寇・風說・御意控・小々控類第、四卷には法令・賞罰・巨室・諸臣・年表・奉書・譜錄・公儀事・美目、第五卷には三賀・書拔・狀控・參勤下向・罪科・給祿・末家類・第六卷には日帳・規式・巡見・御勤・吉凶・履歷類、第七卷には維新關係各種史料を收錄し必要に應じて簡明な解說を附して居る。（小川）

## 六　近藤清石先生著書並藏書目錄

山口圖書館編　一冊　（山口圖書館所藏）

本書は山口圖書館が昭和五年十月圖書館協會山口支部大會の際主催した近藤清石先生遺作展覽會の目錄として作製したものである。先づ卷頭に先生小照遺稿等の寫眞をかゝげ內容を鄕土誌關係圖書及文獻、鄕土誌に關係なき圖書及文獻の二部に分ち更に前者を近藤先生著述目錄・近藤先生藏書目錄に大別し何れもアイウェオ順に配列して索引に便し又簡單なる內容紹介をしてゐる。近藤先生の著作は防長鄕土史研究者にとつては何れも貴重なる研究文獻であるがその刊行を見たるもの極一小部分で多くは自筆稿本としてそのまゝ山口圖書館に保存せられてゐる。從つてこの目錄編成は鄕土研究者の立場から云へば實に敬意を拂ふに足る處の一業蹟と云ふべきで之によつて吾々の便宜を得る處甚大である。（小川）

## 七　長周叢書

村田峯次郎編　三冊　（山口圖書館所藏）

群書類從・史籍集覽等に模して村田峯次郎氏が防長關係文獻の蒐集複刻を計畫せられたものが本叢書で、明治二十三年から二十五年に至る三箇年間に二十冊及解題一冊を刊行した。而して所收書目は次の如きものである。

大江匡房卿傳（一冊）、山田原欽先生事蹟（一冊）、作文初問・三之逕（合一冊）、學則・言葉の德（合一冊）、長門國誌

・長門金匱(一册)、萩古實未定之覺(一册)、忠正公略傳(一册)、毛利隆元公傳・吉川元春公傳・小早川隆景公傳(合一册)、羽賀臺御狩の記(一册)、洞春公略譜・常榮公略譜・天樹公略譜・大照公略譜(合一册)、萬治制法(合一册)吉田松陰先生遺文(一册)、唐太話(一册)、虚實見聞記(一册)、救饑提要・童子先誦・他所問答(合一册)、春霞集(一册)、技癖錄(一册)、獨嘯囊語・漫遊雜記(合一册)、事斯語(一册)、輝元公上洛日記(一册)

更に三十一年には續篇として吉田物語・溫故私記二部六册を刊行した。(小川)

## 雜誌

### 八 防長史學

防長史談會編　(山口圖書館所藏)

昭和四年十月郷土研究を目的として創設された防長史談會がその研究發表機關として翌昭和五年以來昭和十一年に至る迄七年間に汎つて刊行して來たもので册を重ぬること十六册うち三册は特輯號として防長人物誌・朝鮮渡海日記・中國描談・防長邊要志・長門舊族誌・大功圓忠和尙語錄・海保青陵遺著の如き有益なる研究乃至文獻の複刻に充てゝ居る。而して普通號所載の論文・報告は何れも權威ある研究者の筆になるものでその内容も各方面に汎り又新見解新發見が少くない。蓋し防長研究の文獻として第一等に推すべきものであらう。次に論文・報告中の主要たるものゝ目錄を掲げてをく。

防長地理學關係文獻目錄　小川五郎　石川卓美　(一ノ二)

長門國相島に就て　平郡村の研究　大内氏の海外發展　田坂興道　(六ノ一・二)

周防國分尼寺に就いて　今井正　(七ノ一)

三坂圭治　(五ノ一・二)

同上　(二ノ二)

嘉永二年出版、木板本上下二卷、上卷には、神社緣起の新傳說を基として、菅公筑紫へ左遷の折、國府へ留滯の事より筆を起して松崎神社鎭座に至る次第を述べ、菅公の詩歌並に今川貞世の道行振・鹿苑院殿厳島詣記等の文を引きて防府地形の變遷を考察して居るが、孟浪杜撰の言が頗る多いのである。下卷には菅家作の讀樂天北牕三友詩及び叙意一百韻の詩を引きて公が長く國府に留滯し玉へるを辨じ、新古今集に見えたる菅公の歌數首を拾ひて何れも防府にての作と斷じ、終りに菅家系圖と略譜を載せてあるが、此卷にも牽强附會の說が多いやうである。別に上下二卷を合刷したる活字本もある。（御薗生）

## 四　松崎神社顯聖記

近藤芳樹著　二冊　（山口圖書館所藏）

先づ神社鎭座地宮市の起原と、年貢收納兄部職の事を述べて、神殿・中殿・拜殿・樓門等の建築より燈籠・石碑・鳥居・敷石に至るまで一々解說を試み、本社鎭座傳の新古二說に就いて古緣起の正しきことを言ひ、公の筑紫左遷に海路を取りしと云へる新傳說の誤れるを指摘し、弘正方の菅公國府留滯說を辨駁して居る。又、弘氏の主張たる菅家防府の和歌をも否定し、防府地形の變遷に就いても弘氏とは大に所見を異にして居るのである。下卷には本社鎭座の事より、北野との關係及び社領の變遷に就いて考證詳密を極め、附錄として松崎神社に關係ある國分寺・國廳寺の事を詳說してある。要するに近藤氏は弘正方の說に慊焉たらざるものありて、鎭座考を駁擊是正すると同時に、防府の地誌に關する幾多の貴重なる研究を遂げられたる大論文である。本書奥書に、明治七年十二月長門國阿武郡德佐村阿部光忠謹書とある。近時防長史學の附錄として活刷に付し、尚別冊ともなつて居る。（御薗生）

## 五　宇佐宮玄記

寫　一冊　（宇佐神宮所藏）

應永廿二年二月より永享三年正月に至る間の宇佐宮寺御造營並に神事法會に關する記錄にて、寶曆四年政所惣檢校宇佐光輔が類本兩三部を以て校合謄寫したもので、豐前守護大內盛見の敬神の念の極めて篤かりしことゝ、並に造營助成に關する種々の事項を徵見すべきである。（御薗生）

## 一六　日本洞上夜明簾　僧瑞方輯　一冊（御薗生翁甫所藏）

永平寺の承陽祖師以下曹洞宗諸祖の偈頌三百有餘首を蒐錄したるものである。防長には薩摩國福昌開山石屋眞梁の法流瓜葛蕃衍して洞派を壟斷し、溢れて全國に瀰蔓して居る。故に是書の作者に防長と註記せざるも、これに關聯する所は頗る廣汎である。夫等の箴誡頌贊の章、記銘令敎の篇、皆防長の洞派研究の資材たり得るのである。京都貝葉書院刊。（御薗生）

## 一七　覺隱溫古志　兀々子撰　寫一冊（山口圖書館所藏）

石屋眞梁の高足たる防州關雲覺隱永本を初め、其門流諸祖の筆に成れる法語の書冊・偈頌・自贊・遺誡・傳法及び其所在、法系、並に同門諸寺の世祖を揭げたるもので、防長兩國は論なく、其他備中・安藝・因幡・石見・阿波・讃岐・伊豫・土佐・豐後等の諸國に及んで居る。防長の曹洞宗派研究の好資料である。（御薗生）

## 一八　關雲志　雲外龍峰撰　寫二冊（山口圖書館所藏）

周防國小鯖月光山關雲寺（今泰雲寺と改む）は應永年中大內盛見の開基に係り、石屋眞梁を開山とし其嗣法定菴殊禪之を經始し、更に覺隱永本を中興として宗風を扇揚したる古道場にて、其の門葉は山陰・山陽・四國・九州より遠く羽州に及び、數百箇寺に蔓延して居るのである。是書は即ち關雲寺誌にして石屋の德福、覺隱の踪跡、十

「十年前後」「二十年前後」「三十年前後」「四十年前後」「思ひ出の記」「年表」の各項に就いて記して居る。即ち近世に於ける山口教會活躍史とも云ふべきものであつて本書の骨髄と認むべきものである。從つて說明は簡單であるが各々實歷談としての價値生命を持ち大綱を充分捕へて叙述されて居る點推賞すべきである。日本メソヂスト教會發行。（小川）

## 三三　聖フランセスコザベリヨ書翰記

淺井虎八郎編　三冊　（山口圖書館所藏）

基督教界の偉大なる人物フランシスザビエーの生涯をその羅馬並に印度司教に送つた報告的書翰を中心として叙述したもので、云はゞ基督教東方傳道史の最も生彩あるものと云ふことが出來る。內容は三卷に分れ上卷には序としてマルコポーロ及びピントの東方旅行記を載せ本文にはザビエー誕生より印度へ出帆迄を收錄し、中卷は之に續いて東洋各地に於ける聖師の傳道を叙べ、傳聞による日本の事情等が記されて居る。下卷は即ち主として日本に於ける聖師の業蹟を叙するもので、就中山口に於ける聖師の活動は最も興味が深い。蓋し大內文化殊に大內氏の西洋文化攝取を見るには本書は最も信用の置ける勝れたる文獻である。明治二十四年刊。（小川）

## 三四　異宗徒御預り一件

寫　三冊　（公爵　毛利家所藏）

耶蘇教は德川幕府時代堅く禁ぜられてゐたが、肥前浦上村附近には代々密に之を信仰する者があり、幕末外國との交際が開け、長崎其他に天主堂が設けられて以來、公然之に出入し禮拜を行ふに至つた。明治新政府は依然耶蘇教禁止の政策を踏襲した爲、浦上村異教徒の取締は、內政上急を要する事であつたが、外交問題が加はつて相當厄介な事柄であつた。然し新政府は遂に之を嚴罰すべきに決し、先づ巨魁百十數名を明治元年五月、長州・津和野・福山の三藩に預け、翌二年十月更に教徒三千數百人を金澤・和歌山・鹿兒島・廣島・山口等三十餘藩に配

付して嚴に監督せしめ、軈て六年耶蘇教を解禁するに至り、四月全部郷里へ歸還せしめた。本書は、其間我藩に預つた異教徒（明治元年六十六人、同二年二百三十一人）の戸籍、動靜を始め、政府の達書・藩廳の沙汰書・諸役人の往復書・浦上村百姓改心者歎願書・同起請文等を載錄した一件記錄である。（高橋）

# 教育

## 三五　日本教育史資料

文部省編　九冊　（山口圖書館所藏）

文部省に於て學制頒布前の本邦教育史編纂の資料として、明治十六年二月各府縣に令達して、府縣廳及び學校等所藏の舊記其他前儒の私記古老の口碑等を調査錄上せしめたものを、編纂したものである。編次は先づ全編二十五卷を九冊に纏め、第一冊乃至第六冊を列藩之部、第七冊を幕府之部、第八・九兩冊を雜纂及び全國私塾寺小屋表に大別してある。而して列藩の部は更に學制及學校（藩營）、鄕學、參照、學士小傳、學議、學館記、雜記、祭儀、補遺、古記錄に分つてあり、幕府も之と大同小異である。

扨て本書中防長に關係する部分を抄出すれば左の如くである。

第二冊列藩（卷六）　中「舊山口・德山・岩國・淸末藩學制」（一五七頁）

第三冊鄕學（卷九）　中「周防國熊毛郡麻鄕村學校以下十校、長門國阿武郡萩鄕學校以下十校」（二九頁）

第五冊學士小傳（卷一二）　中「舊山口藩士大田兩氏」（一七頁）、學議（卷一三）中「舊山口藩士建白書」（一三頁）、學館記（卷一四）中「舊山口藩明倫館記・有備館記・舊德山藩興讓館新廟

御密用方の記録である。吉凶その他宗支間の交際、並びに朝廷幕府への報告事項がその主なものであって、第一冊は享保十六年から寛政三年まで、第二冊は元禄五年から文化十一年まで、第三冊は文化十一年から文政八年まで、第四冊は天保十二年から同十四年まで、第五冊は天保十四年から弘化四年まで、第六冊は安政六年から文久元年まで、第七冊は文久元年から元治元年まで、第八冊は明治元年の記録である。毛利文庫。（三坂）

## 二五五　豊浦藩公務記

写五冊

明治元年正月から同四年十二月に至る四箇年間に豊浦藩（旧長府藩）から朝廷に提出した届書、願書等の控で、これによって維新後における豊浦藩の領政の大略を知ることができ、明治四年だけ二冊から成る。その一冊は原本毛利家所蔵、他の一冊は三年以前の三冊と共に山口図書館に蔵し、毛利家のものは写本である。毛利文庫。（三坂）

## 二五六　公儀所長府帳書抜

写一冊

公儀所長府帳の摘録である。享保十年七月水野隼人正江戸城内において乱心し、毛利主水正師就負傷の一件、同十七年中国四国虫祐被害届並びにその対策一件、同二十年主水正卒去、岩之允（重就公）相続一件、宝暦元年重就公宗家相続一件、以上の四項目から成る。毛利文庫。（三坂）

## 二五七　徳山御旧記　就隆御一代事

写一冊

慶長十四年から元禄八年まで、すなわち徳山初代就隆、二代元賢の代を経て、三代元次の初政に至るまでの間、主として幕府との関係事項を日記体に記したものである。巻首に「此旧記は今井谷御内願之趣有之、旧記之廉々被仰込被下候様との儀ニ而、書抜差出候へ共、此廉々をは従此御方は不被仰込ニ付於当省写取本書をは被差返候事」また「天保四巳九月十二日本書赤川喜兵衛より請取写取、同十七日同人江差返ス、同十八日御家老呼出被差返候事」

とあり、天保四年徳山藩において幕府に内願したいことがあったので、藩初以来幕府から受けた寵遇を列記して宗藩に示し、宗藩から幕府に進達せんことを請うたのであるが、宗藩においてはこれを謝絶し、本書を写取って原本は徳山毛利家に返却したのである。毛利文庫。（三坂）

## 二五八　徳山事上御用所記録書抜　写七冊

第一は慶長年中から正徳六年まで「徳山御祝儀事」二冊、第二は承応三年から元禄十六年まで「従公儀（幕府）被仰出之旨徳山江被相達候事」一冊、第三は延宝七年から正徳六年まで「徳山御凶事」一冊、第四は天和二年から享保十年まで「鶴鷺雲雀御拝領御知せ事」一冊、第五は元禄六年から宝永七年まで「公儀所日帳書抜」一冊、第六は正徳二年から享保十六年まで「此御方（宗家）御祝儀事」一冊、計六項目七冊から成る。毛利文庫。（三坂）

## 二五九　記録所日記書抜徳山之部　写一〇冊

記録所日帳並びに御規式帳の内から徳山関係の記事を書き抜いたものである。第一は寛永十八年から享保十六年まで二冊、第二は享保十二年から同十六年まで二冊、第三は宝暦十三年から寛政九年まで六冊、計十冊から成り、第一の二冊は、編年的に要項のみを記し、第二第三の冊は、記録所日帳の記事をそのまま抄録したものである。毛利文庫。（三坂）

## 二六〇　徳山藩合併一件　写一冊

徳山藩は、明治四年六月、廃藩置県にさきだって本藩に合併され、九月朔日、旧徳山領の全部をもつて徳山部を新設し、部署を徳山に置いた。本書はその一件記録であって、太政宮の達書、本藩知事元徳公の諭書、部署の新設、

役員の任命、徳山小学・山口中学の移管等、合併に関する基本的な史料が多い。なお合併後の部内民政の研究には、山口図書館所蔵の徳山部本控一冊がある。毛利文庫。（三坂）

## 二六一　清末公務案　写五冊

内容は豊浦藩の公務記と同じく、朝廷への願書、報告書等を集録したものである。明治二年が一冊、同三年四年が各二冊、計五冊から成り、いずれも原本であって、維新後の清末藩の史料としては、もっとも基本的なものである。毛利文庫。（三坂）

## 二六二　柏村数馬日記　写三七冊

柏村数馬は初め茂十郎といい、諱は安致、後に信と改名した。嘉永四年御小姓役に任用せられたが、それから御使番役、番頭役、御直目付等を歴任し、明治になっては権大参事となり、四年十一月以来毛利家の家令となって、二十八年十二月に卒去した。広沢真臣は数馬の実弟である。日記はかれが明倫館在役時代の嘉永二年正月から始まり、その晩年（卒去前五日）まで書き継がれ、その間わずかに非役であった文久三年の一部と、明治二、三、四、八、九年とを欠くだけである。御小姓役その他、主として忠正・忠愛両公の側近に仕えていた関係上、政治国事または毛利家々事の枢要にふれることの多い貴重な資料である。毛利文庫。（高橋）

## 二六三　諸隊会議所日記　写二冊

大正五年山口柴垣彌惣氏宅の襖の下張になっていたものを剝ぎ取り、年月の順にまとめたものである。慶応二年二

月から七月までと、翌三年二月から六月までとの二巻から成り、所々に欠けた部分もあるが、諸隊の史料としてはすこぶる貴重なものである。特に上巻の内、六月以降の四境戦争に関する記事には注目すべきものが少なくない。毛利文庫。（三坂）

## 二六四　脱隊暴動一件記事材料　写五冊

明治二年十一月諸隊を廃し、常備軍を編制せられるにあたり、その選に漏れた不平の隊兵は、本陣を脱して宮市方面にあつまり、長官を弾劾し、政府に反乱の気勢をあげた。世にこれを脱隊の暴動といい、明治初年の大事件であった。本書は福井清介氏が藩公父子の諭書、脱隊の歎願書等を初めとし、広く当時の関係史料を收集し、これを年序に並べて、事の起源からその鎮定に至るまでのてん末を明らかにしたものである。間々旧記の誤読もあり、謄写の脱遺もあるが、全編を通じて少しも編者の意見をはさまず、丹念に根本史料をあつめている点、研究者にとり便利な本である。毛利文庫。（三坂）

## 二六五　蓬仙日記　三輪田元綱著　写一冊

足利将軍三代の木像を京都三条磧に引出して梟首した伊予の勤王家三輪田元綱の、安政六年正月から翌万延元年十二月に至る日記で、書中の人物はことごとく熱心な国学の研究者ばかりであって、古典の研究と歌道に終始しているが、近藤芳樹が伊予に渡って、安政六年の正月十三日から廿日まで令義解を講釈し、その間一日歌会の催しがあった。十一月芳樹再び伊予に来って令義解を講釈し、廿八日その出発に臨んで元綱同行して長州に遊び、翌万延元年石州の国学者岡熊臣を訪い、後転じて、長州須佐育英館の学頭小国剛蔵を訪うなど、伊予の国学者と防長人の学問思想と密接なる連鎖のあるを思わせるものがある。伊予西園寺源透氏所蔵。（御薗生）

二六六　**軍政記録**　写四冊

明治三年正月から翌年十二月に至る二箇年の諸隊及び海軍関係の記録である。隊号の変更、隊長以下幹部の任免、隊士の訓練、遊学、入隊除隊、招魂場の建設、外国教師の傭聘等をその内容とし、旧藩時代の軍政記録としては最後のものである。毛利文庫。（三坂）

二六七　**長防墓誌碑文集**　写一冊

明治二十年代に田中某の編さんしたもので七巻から成り、約二百三十種の墓誌銘及び各種碑文を集め、防長二州各地のものをあつめている。しかもその所在と碑銘選者をも忠実に掲げたのは親切である。「防長金石文誌」「防長金石文」等類書との重複は勿論相当あるが、彼此対照して参考とすべきである。原本は長府図書館所蔵。（小川）

二六八　**巖邑金石文**　藤田葆編　写一冊

巖邑沿革志の一部で上下二巻から成り、横山白山宮釣鐘以下約百四十篇の鐘銘、碑銘、墓誌銘等を收録している。すべて有益な資料であるが、特に墓誌銘は宇都宮遯菴・宇都宮三的・戸川整斎・玉乃九華・長谷川禹錫・二宮錦水坂本雲耶・三須成懋等をあつめ、岩国人物伝研究資料として貴重である。（小川）

二六九　**岩國を中心とする附近に渡る金石文**　上田純雄編　一冊

岩国附近の金石文研究書としては既に藤田葆編の「巖邑金石文」のようなすぐれたものがあるが、本書は編者が実地に踏査して所在の異動を明らかにし、また魯魚の誤りを正し、更に若干の追補を行っており、彼此対照してよく岩国附近金石文の全ぼうを知ることができるのである。瑞相寺鐘銘以下、鐘銘、墓碑銘、その他歌碑に至るまで合

して百八十八、また未踏査分として文献中から拾うたもの八十九を内容としている。（小川）

二七〇　**徳山名士景仰録**　浅見栄熊編　一冊

前後二編から成り、毛利就隆公以下約百五十の先賢名士の墳墓を掃苔し、その墓誌、歿年及び略伝を掲げ、これを墓地別に整理し、しかも各墓地における各墳墓の位置を図によって示している。昭和十年刊。（小川）

二七一　**鴻城掃苔集**　御薗生翁甫著　一冊

大正十五年一月から昭和二年二月までに、著者によって実地踏査された山口を中心に、宮野・仁保・大内・平川・大歳・吉敷の諸町村に存在する著名墳墓約三百を収録し、略伝を付したものである。人物研究資料としていずれも貴重なものであるだけでなく、掃苔者のふさわしい案内書ともいうことができる。昭和二年謄写刷。（小川）

二七二　**萩名家墳墓志**　安藤紀一編　写一冊

萩市内の諸墓地に散在する毛利輝元公以下約百六十名の先賢名家の墳墓を調査し、墓地別に配列整理し、身分閥歴を簡単に注解し、歿年月日を記載したもので手頃な掃苔録である。安藤芳彦氏所蔵。（小川）